

太平天国の鎮江、揚州における戦い ——現地軍の対外交渉と釐金制度の創設を中心に——

菊池秀明

はじめに

太平天国は広東出身の下層移民である洪秀全とキリスト教の出会いがきっかけとなって生まれた。洪秀全は中国の歴代皇帝を唯一神である上帝やハウエを冒瀆する者として否定し、始皇帝以前の中国に見られた複数の王からなる新王朝を作ろうとした。また辺境の移民社会における厳しい競争と格差の中で行き場を失った下層移民は、「上帝のもとでの一大家族」という理想を掲げる上帝会に加わって生存の保障と社会的上昇の希望を求めた。そして一八五〇年に蜂起した太平天国は、当時の中国で最も豊かだった江南地方へ進出した。

筆者はすでに一連の著作によって、太平天国が発生した社会背景と蜂起、南京への進撃、北伐と西征など前期太平天国の実像を明らかにした¹⁾。また近著においては、太平天国の全体像について見通しを示した²⁾。だが彼らが都を置いた南京およびその一帯の社会変化と清軍との戦い、上海に進出していたヨーロッパ諸国との交渉、この運動の命運を左右する内部分裂となった天京事変に至る過程については、なお検討すべき課題が多く残されている。

本稿が取り扱うのは太平天国の鎮江、揚州における活動と対外交渉、清朝側の動向である。すでに筆者はこの時期ヨーロッパ勢力が太平天国をどのように見ていたかについて、主として東洋文庫所蔵の英文史料を中心に検討を加えた³⁾。また太平天国の外交を考える場合、南京を訪問した使節団と並んで江蘇東部へ進出した現地軍とヨーロッパ勢力の交渉も検討が不可欠である。さらに上海で太平天国に呼応して蜂起した小刀会との連携、その後清朝の地方統治で重要な役割を果たす釐金制度の創設など、鎮江、揚州の太平天国の活動には解明すべき多くの課題が残されている。

2000年以後の中国では太平天国に関する史料集が新たに刊行され、従来見ることの出来なかった史料を参照できるようになった⁴⁾。また筆者は台湾の国立故宮博物館で多くの檔案史料を収集し、これを中国第一歴史檔案館所蔵の檔案史料と対照させる作業を行ってきた。本稿はこれらの史料を利用しつつ、太平天国の鎮江、揚州占領とその統治、鎮江における現地軍のヨーロッパ勢力および小刀会との交渉、清軍の江北大営の戦いと釐金制度の創設について考えてみたい。

一、太平天国の鎮江、揚州進出と現地軍の対外交渉

(a) 太平軍の鎮江、揚州占領と清軍の江北大營設立

太平天国が南京を占領して間もない1853年3月下旬、東王楊秀清は長江下流の要衝で大運河の経由地にあたる鎮江と揚州へ兵を送った。

鎮江を攻めたのは指揮羅大綱、呉如孝の軍であった。京口副都統だった文芸によれば、3月31日朝に太平軍は鎮江の沖合に姿を見せた。江蘇巡撫の楊文定は清朝の水軍および蘇松太道呉健彰が雇ったマカオのポルトガル船、軍船に乗った潮勇を率いて迎え撃ったが、昼になると風が止み、清軍の船は身動きがとれなくなった。すると太平軍の軍船は東へ下り、約1万人が上陸した。文芸は旗兵500人を率いて迎撃したが防ぎきれず、彼自身も負傷して丹徒県に退いた⁵⁾。

これに対して江蘇巡撫楊文定の上奏は様相が異なっている。南京の陥落後、彼は文芸に陸路の兵を率いて防禦を固めさせ、自分は水軍を率いて瓜口を守った。だが間もなく鎮江營參將の経文泰から、各地から動員した兵が逃亡したとの報告が入った。また八旗兵も所定の場所に駐屯していなかった。彼らの多くはアヘン戦争中の1842年にイギリスが鎮江を攻めたときに敗北した兵で、敗戦後の処分が行われなかったため、文芸が再三叱咤したものの、「その恇怯ぶりは緑營と等しい」と戦力にならなかった。

太平軍が100隻余りの船で進攻すると、楊文定と蘇松鎮総兵葉長春はこれを迎え撃った。彼らは十数隻を撃破したが、間もなく3~400隻の「大股賊船」が姿を見せた。正午近くになると風がやみ、清朝側の軍船が下流へ流されると、太平軍の軍船は瓜口を超えて進撃を始めた。清朝の水軍は鎮江の西にある金山に退き、斥候を山に登らせて陸路の軍を探したが、援軍の姿は見当たらなかった。ついで太平軍が上陸して金山寺を焼き払うと、驚いた清軍は長江に浮かぶ焦山に撤退した。そして太平軍は鎮江府城を占領したという⁶⁾。

楊文定はこの戦いについて「賊匪は四、五千人に過ぎず、決して長技はない。ただ江南の武備は廢弛してすでに久しく、また江寧が失われたために人心は驚きや疑いを倍增させ、ついに事態を誤った」と分析した。また天候によって動きが取れなくなる帆船ではなく、イギリスの蒸気船を用いることが不可欠であると述べ、呉健彰と葉長春に上海で交渉を行わせると報じた⁷⁾。

この報告を受けた咸豊帝は、太平軍が「南北の咽喉」である鎮江を攻めることは予見できたにもかかわらず、十分な準備を行わずに占領を許した罪は免れないとして、楊文定と葉長春を革職のうえ留任させた⁸⁾。また文芸は即行革職として刑部に罪を審議させた⁹⁾。

次に太平軍は4月1日に丞相林鳳祥、丞相李開芳、指揮曾立昌の指揮のもと揚州を攻撃して占領した。漕運総督の楊殿邦によれば、31日に太平軍の軍船が姿を見せると、彼は長江北岸の瓜洲にいた水軍に迎え撃たせたが、やがて風向きが変わって太平軍の攻勢を防ぎきれなくなった。同時に儀徵県から陸路の兵が現れ、船から上陸した部隊と共に揚州府城を攻撃した。もともと戦意のなかった楊殿邦は大運河沿いの高郵州、宝応県方面へ退却した¹⁰⁾。

また当時揚州城内には数百人の兵しかおらず、揚州府知府の張廷瑞、署江都県知県の陸武曾は自殺を図るか、抵抗し負傷したところで救出された。城が占領されると、彼らは城東にある仙女廟などで団練を集めて太平軍の進攻に備えた¹¹⁾。

楊殿邦は上奏の中で、太平軍が揚州から北上する可能性があること、大運河の堤防は県城の城壁よりも高く、防衛が難しいことを指摘した。そして彼は太平軍が進攻してきた場合、淮河の水門を開き、洪湖の堤防を決壊させて敵を水没させ、動きを止める他に方法がないと述べている¹²⁾。

その後楊殿邦は清江浦へ向かい、河道総督の楊以増と対応を協議したが、楊以増は北岸の防衛を命じられていた欽差大臣の琦善、直隸提督の陳金綬らを急ぎ清江浦へ向かわせるように求めただけで、これらの措置については触れていない¹³⁾。咸豊帝も地域に大きな被害をもたらす堤防の決壊は慎重に行うように指示したうえで、楊以増を革職留任、陳金綬を摘去頂戴の処分としたうえで引き続き防衛に当たさせた¹⁴⁾。

長江北岸は太平天国が北方へ進出する拠点となる地域であり、清朝は厳重な防衛ラインを構築しようと望んでいた。後に北伐軍と対峙した僧格林沁は、1854年に山東省連鎮で大運河の水を引き込んで林鳳祥の軍を包囲したが、この段階で同様なアイデアが出されていた事実は注目される。

さて長江北岸の防衛を統轄することを命じられた琦善は、南京対岸の江浦県へ到達しつつあった。先行した陳金綬と四品京堂の勝保が浦口鎮を占領すると、4月5日に琦善も浦口に到着し、陳金綬らの軍を儀徵県へ向かわせた¹⁵⁾。

4月11日に陳金綬らは揚州の西北15キロ程にある甘泉山に到着して陣を敷いた。3日後には琦善が浦口から到着し、陳金綬、勝保と協議した。攻撃に先立って琦善が調査させたところ、太平軍は揚州城の濠の外に三重の木城を設け、内側から土を盛るなどいち早く防備を固めていることを知った。そこで16日に陳金綬と勝保は帽兒墩、琦善は雷塘集へ陣地を移して2日間攻撃をかけた¹⁶⁾。

清軍は引き続き揚州城への接近を図り、琦善は城から1.5キロほどの保山へ、陳金綬らも司徒廟にそれぞれ陣地を移した。すると4月19日に太平軍は出撃して琦善の陣地を攻めた¹⁷⁾。29日にも両軍は二十四橋の法海寺などで戦った¹⁸⁾。

その後琦善は揚州城外に黒竜江、吉林八旗の騎馬隊4,000人を含む1万数千人の兵力を配置して江北大営を成立させた。この江北大営は南京城外にいた欽差大臣向榮らの江南大営と連携して太平天国に軍事的な圧力を加えることになる。

(b) 鎮江における太平天国の統治と対外交渉

次に鎮江における太平天国の統治と対外勢力との交渉について検討したい。

長江南岸にあたる鎮江の太平軍と直接対峙したのは、江南大営にいた欽差大臣向榮の軍であった。彼は鎮江と対岸の瓜洲は「上海進兵の路」¹⁹⁾にあたり、まず鎮江を奪回すべきだと

考え、4月下旬に江南提督鄧紹良に8,000人の兵を率いて鎮江へ向かわせ、已革副都統の文芸の旗兵と共に鎮江城を攻撃させた²⁰⁾。

5月5日に鄧紹良らの軍は鎮江城から10キロほどの官唐橋へ至り、南門外の観音山へ攻撃をかけた。すると城内から出撃した太平軍4~5,000人と戦闘となり、太平軍は敗走と見せかけて退却した。これを追って城下に至った清軍に背後から伏兵が襲いかかり、清軍は多くの死者を出した²¹⁾。また長江河面の主導権を握るべく派遣された総兵和春の率いる水軍20隻は、5月9日に鎮江の下流にかぶ焦山へ至った。だが太平軍の水軍は300隻余りと多く、岸辺に築かれた砲台の支援を受けていたため歯が立たなかった²²⁾。

5月22日に羅大綱は城内の太平軍を出撃させ、鄧紹良の軍と交戦した。また26日に和春と鄧紹良の水陸両軍が鎮江府城を攻めたが勝利することは出来なかった²³⁾。さらに29日に清軍は蘇松太道呉健彰が上海で雇った「夾板商船（ヨーロッパ船）」の支援を受け、水陸から鎮江を攻撃したが失敗した²⁴⁾。

これらの結果を知った向荣は「私どもは元々まず鎮江を奪回し、江上の賊船を一掃したうえで、江寧（南京）を取り戻して彼らが北進する道を絶とうと考えていたが……、先に鎮江を奪回するという考えに囚われないことにした²⁵⁾」と述べ、鎮江の戦いが長期にわたることを覚悟せざるを得なかった。また水軍の船は太平軍の挟み撃ちに遭うことを恐れて長江上流へ向かおうとせず、和春は水軍の指揮を外されて江南大營へ戻った²⁶⁾。

さて鎮江を占領した太平軍は、城を要塞化して南京防衛の拠点とすることを試みた。光緒『丹徒県志』は次のように述べている。

賊目で偽元帥の呉汝嘯 [孝——筆者による訂正]、偽検点の羅大綱は城を占領して堅守の計をなした。至る所で人を捉え、新たに城を増築した。廟や民家を壊して、大木を城上に架けて砲台を築いた。同時に偽示を出し、人々に米や麦、家畜を差し出させた。また兵を率いて丹徒鎮へ行き、民の財物を掠めた……。

城外へ避難しなかった者は、空屋に男女を分けて収容し、それぞれ男女の偽司馬を立てて管理させた。一つの建物に数十人ずつ集められ、逃げる者や密かに話をする者、建物を出る者は立ちどころに斬られた。さらに女性たちに命じて陸路あるいは船に乗せ、偽官を派遣して金陵へ連れて行った。これを「天堂に登る」と言ったが、じつは食糧を節約するためだった²⁷⁾。

ここでは太平軍が鎮江府城の防御力を高めるために陣地の構築を進めたこと、食糧や人夫の徴発を行い、城内に残っていた住民を男女別に「館」に収容して厳しく管理したこと、また女性たちを南京へ連行したことが指摘されている。

1853年6月に鎮江を訪問したアメリカ人宣教師のチャールズ・テイラーは、長江の岸辺から城まで裏側を厚く土で固めた防護柵が設けられ、溝やバリケード、落とし穴が作られる

など「城市全体が堅固に要塞化されており、その軍事技術の水準が極めて高いことを知った」²⁸⁾と記している。二度目の鎮江訪問だった彼は、かつての都市の繁栄は見るともなかつたこと、「館」に収容されていたのは避難出来なかつた老人たちで、予想に反して殺されることなく、食糧を支給されていたが、家族と離散した悲しみにくれていたと述べている²⁹⁾。

また太平軍が鎮江の女性住民を陸路あるいは船で南京へ連行したという記述は、当時清軍が入手した太平天国側の文書から確認することができる。それは協守鎮江指揮の洪三度が「貞得王」なる人物へ充てた報告で、「現在兄弟姉妹と銀物を載せた船は共に無事に通過した」³⁰⁾と述べている。占領地の住民を南京へ送る措置は揚州でも行われ、『金陵癸甲紀事略』によると1853年夏の段階で鎮江、揚州から南京へ送られた人数は男性が約5,000人、女性が約1万人だったという³¹⁾。先の地方志の記事は女性を連行した目的を食糧の節約としているが、直接には「天下の人々を暖衣飽食させる」という上帝教の理念に基づき、人々を安全な場所である南京で保護し、養うことを企図していたと考えられる。だがその結果南京の人口は増加し、かえって食糧不足を招くことになった。

さてチャールズ・テイラーが太平軍の陣地に入ると、太平軍の将兵に囲まれた。その時の様子を彼は次のように記している。

日の出時分に、我々が大きな砲眼の脇にある砦柵に入ると、立ちどころに一群の黒い顔つきをした‘長髪’姿の大人と子供に囲まれた。彼らはみな手に剣、火縄銃、長矛などの武器を持ち、長矛の先には黄色く小さな三角旗がはためいていた。彼らの中の多くの者は紅、黄二色の小さな絹の頭巾で巻き上げられていた。彼らの制服は多様で、明らかに必要な色の布や絹が不足しているようだった。見たところ彼らは身体にぴったりの上着に黄色を用い、緩やかなズボンに紅や藍などを好んで用いていた。

その結果、彼らの服の色は様々であり、それは将兵たち自身の年齢や身の丈、顔つきや話す言葉までが多様なものと同じだった。それというのも彼らは、この愛国的な軍隊が広西から北上して古代の首都であった南京を占領するまでに勝利の進撃を行った幾つもの省から集められたからである³²⁾。

ここでテイラーが会った太平軍将兵は多くが紅か黄色の頭巾をかぶり、黄色い号衣を身につけていた。これは太平軍が上帝の色として黄色を重んじたことと関連があり、手にしていた長矛にも黄色の三角旗がついていたという。兵士たちの出身地は様々で、南京占領後に軍の拡大と再編制が行われたため、将校に広西人、下士官に湖南、湖北人、一般兵士に長江流域の各省や南京人が多かったと見られる³³⁾。

その後テイラーは鎮江府城の旧清朝政府衙門へ入り、検点に昇進していた羅大綱に面会した³⁴⁾。彼によると羅大綱の出で立ち次は次のようであった。

程なく一人の中ぐらいの背丈の、およそ45歳位の男が隣の部屋から姿を見せ、私のそばに座った。彼はしっかりとした体つきで、頭の形はよく整えられており、アーチ状に突きだした眉の奥は鋭い黒い眼をしていた……。彼の振る舞いや服装に軍人らしさは見当たらなかった。彼は短い青絹のジャケットを身にまとい、濃い茶色のたっぷりとしたズボンを履いていた。私は羅大綱の軍事的な聡明さと技倆について広まっていた噂から、王者然とした出で立ちを想像していた。このため一般的な中国官僚のように尊大な態度を見せない人物が姿を見せたとき、私はそれが羅大綱だとは信じられなかった³⁵⁾。

ここで羅大綱は平服姿で、「王者然とした」尊大な態度を見せなかったとある。5月初めにボナム一行が南京からの帰路鎮江へ立ち寄った時も、羅大綱は聡明な人物と受け止められており、間もなく官服姿に着替えた羅大綱が部下に指示を与え始めると、テイラーは彼が間違いなく羅大綱であると確信した。

そこでテイラーは自分の職業と訪問の目的を伝え、キリスト教のパンフレットを取り出して羅大綱に送った。すると羅大綱は大いに喜び、我々の信じている教えは同じであると語った。続いてテイラーは太平天国の礼拝に参加し、食事を共にした。すでに太平軍の陣地で頌栄の言葉が唱えられていることを発見した彼は、礼拝の様子を好意的に観察している。また食事の前に感謝の祈りを共にささげることを提案し、太平天国側も快くそれに同意した。ただしテイラーは礼拝の奏楽について「銅鑼や太鼓、シンバルやホルンその他の楽器が調子外れな音を奏でていた」と述べ、それが「礼拝の中で極めて重要な敬虔な気持ちを生み出すことが出来るとは思えなかった」³⁶⁾と評している。

その後テイラーは鎮江に駐屯する太平軍の兵力についてくり返し尋ね、5～6万人という回答を得た。これは2,500人を「一軍」あるいは1万人と数える太平軍特有の言い回しで、実際の兵力は1万2,500人から1万5,000人だったことになる³⁷⁾。また彼は太平軍の将兵について「行動する時に決して規則正しく、秩序立っている訳ではないが、完璧な規律をもって命令に絶対服従しているのを見た。そして彼らの全身に静かで真剣な熱狂があふれ、彼らの運動の正統性およびその最終的な成功に対する完全な自信が現れていることに強い印象を受けた」³⁸⁾と記した。さらに食糧は十分に足りているが、それは近郊の農民たちと交易を行っているためと指摘している。これは占領当初の南京の状況と一致しており、聖庫に集めた金銭を用いて高い値段で食糧を購入していたことがうかがわれる³⁹⁾。

最終的にテイラーは、鎮江に進出した太平軍が上海を攻撃する意図があるのかどうか、確認することはできなかった。だが羅大綱は以下のような手紙を上海のイギリス領事館に渡すようにテイラーに託した。

真天命太平天国殿左五検点羅 [大綱]、書をイギリス国の兄弟各位に致す。

五月初一日 (6月5日)、貴国の兄弟であるテイラー氏が持ってきた書籍は、すでに

全て受け取りました。同じく上帝を信じるからには、みな兄弟であります。送られた書籍を拝見したところ、[太平天国の宗教書と] 互いに符合しており、およそ一つの信仰に属することがわかります。

さきに貴国の船が[鎮江へ] 来られた時——ボナムらの南京訪問をさす——は、後方から偽清の妖魔の船がついて来ました。いま貴国の船が来られた時も、清の妖船が後ろにいました。貴国が誠意と信頼をもって相手を遇することを、私どもはいささかも疑いませんが、現在は天命に順って人心を合わせ、[漢人を] 興して満洲を滅ぼす激動の時代にあります。皆さんがこのことをよくご存じであることは、わざわざお尋ねするまでもないことです。

いま私どもは通商を阻むものではありませんが、戦闘が行われている以上、往来することには恐らく不都合があるでしょう。情勢を鑑みるに、二、三ヶ月のあいだお待ちいただければ、清の妖魔はことごとく滅ぼされることでしょう。貴国が来られる時も清の妖魔に欺かれることはなくなり、その方がよいではありませんか⁴⁰⁾。

ここで羅大綱はテイラーが送ったキリスト教の書物が、彼ら自身の上帝信仰と完全に一致すると述べたうえで、上海から来た外国船はみな清軍の追尾を受けており、太平軍守備隊との交戦に巻き込まれる危険があると指摘した。そして清朝との戦いが終わるまでは、通商のために太平天国地域を訪れることを控えてほしいと提案している。

この手紙はへりくだった表現である「寸楮」の一言を添えるなど、「洋兄弟」である欧米人を尊重した内容となっており、各国の使節が南京で受け取った文書とは好対照を見せている。これは鎮江におけるもう一人の司令官だった呉如孝にも共通する特徴で、呉如孝は蜂起前に広東で交流があった宣教師の名を挙げ、その安否を問う手紙を送った⁴¹⁾。

ヨーロッパ側が求めた国家間交渉においては華夷観念を脱却できなかった太平天国であるが、実質的に対外交渉の窓口となった鎮江においては、宣教師とのパーソナルな関係を通じて交渉を行う可能性があったと見る事が出来る。実際に1853年5月に洪秀全と接点があったアメリカ人宣教師のイッサカル・ロバーツは太平天国から手紙を受け取り、広州から上海へ赴いてアメリカ公使のマーシャルに太平天国の占領地域で伝道することを願ひ出た。だがマーシャルはこの申し出を拒絶し、宣教師を通じての太平天国との交渉は進展しなかった⁴²⁾。

(c) 上海小刀会と太平天国の関係

その後6月に鎮江では大きな戦闘はなかったが、7月に入ると太平軍が攻勢をかけた。鄧紹良の報告によると、夏を迎えて清軍陣地では疫病が流行した。これを見た太平軍は7月14日に出撃して鄧紹良の陣地を攻めた。清軍は消耗が激しく、鄧紹良は病気になるいは負傷した兵を付近の民家へ移して治療させた。

7月18日に太平軍は2~3,000人で再び鄧紹良の陣地を攻めた。清軍が迎撃すると、太平軍は「回身奔逃」したため、清軍はこれを追って城下へ至った。すると5月の戦いの時と同じく伏兵が姿を見せ、さらに別の一隊が後方の清軍陣地に火を放った。清軍が救援に向かおうとすると、城内から出撃した太平軍と挟み撃ちになり、「七営は焼かれ、残る五営も兵の心は皆乱れた」⁴³⁾と混乱に陥った。

この時潮勇を率いていた捐職都司の劉廷鏞（広東人）が救援に駆けつけ、太平軍の攻勢を退けたが、陣地を失った清軍は丹陽県に退かざるを得なかった。鄧紹良は陣地を守るために兵士に塹壕を掘らせるなどの準備を怠り、また太平軍の伏兵戦術である「回馬槍」によって二度も敗北した罪で解任処分を受けた⁴⁴⁾。

さて鎮江の太平軍首領が羅大綱だったという事実は、上海のもう一つの軍事勢力となった天地会系組織との交渉を考えるうえで重要である。1853年9月に劉麗川率いる上海の小刀会が蜂起し、上海县城を占領した。劉麗川は広東香山県人で、1845年に香港で勞徳澤なる人物の教えを受け、「ひそかに軍士を招いて」天地会を創設したが、やがて上海へ移って小刀会を組織した。彼は太平天国との提携を図り、「いまだ職を受けていない臣下」の立場から太平天国に支援を求める上奏文を南京へ送った。

そこで劉麗川は「時世が変遷し、人民が失業」するのを見て、「乱世にあって功名を立てる」ことを願った。そして太平天国が南京に都を定めたことを知り、「数千の義勇」を率いて上海で蜂起した。また上海近郊の数県を手に入れて「居民や舗戸を保護」したので、急ぎ「官吏を遣わして赴任させ」「民の望みを慰めてほしい」⁴⁵⁾と述べている。

また同時に上海のイギリス商人であるレイノルド（Reynold、中国名は勒唎吐）が羅大綱へ充てて送った手紙も残されている。それによると、この商人は3月にヘルメス号に乗って南京へ行き、頼漢英から「もし外国の兄弟がここへ来て貿易を行いたいと願えば、決して拒まず、必ず対応する」と言われた。そこで5月に中国船に乗って焦山へ至ったが、清軍兵士の妨害を受けて上海へ戻った。またテイラーが持ち帰った羅大綱の手紙を読み、「中外の兄弟」は同じくキリスト教徒であることがわかったため、洋槍60丁、洋刀40本や火薬などを携えて交易にやってきたと述べている⁴⁶⁾。

これらの手紙は途中清軍に押収され、南京に届かなかった。船に乗っていた外国商人3人も捕らえられ、各国の領事館に引き渡された⁴⁷⁾。

だが上海小刀会が太平天国と連携を図っているという知らせは、その後丞相となった羅大綱を通じて東王楊秀清のもとに届いた。『金陵雜記』によると、羅大綱は小刀会の蜂起後まもなく「情報によれば、上海で別の一群の者たちがすでに城を占領した。彼らは約三、四千人いるとのこと」⁴⁸⁾と楊秀清に報告した。この頃劉麗川は小刀会への伝道を試みた宣教師ロパーツに対して、南京へ水陸両路から二通の手紙を送ったと答えており⁴⁹⁾、恐らくは陸路の手紙が羅大綱のもとに届いたと考えられる。元天地会首領で「よく多くの者を羅織（罪に陥れること、ここでは会党仲間に取り入れることを指す）し、人心を籠絡する」⁵⁰⁾と言われた

彼のネットワークが活かされたのである。

9月下旬に劉麗川は蜂起当初の「大明国」に変えて太平天国の国号を用い、自らも「太平天国招討大元帥」⁵¹⁾を名乗った。また1852年7月に南王馮雲山の三男である馮癸華はロバーツに連れられて上海へ至り、南京へ行くチャンスをうかがっていたが、これを知った劉麗川らは馮癸華を馬に乗せて城内へ迎え入れた⁵²⁾。少なくとも彼らは太平天国に合流する意志を持っていたと考えられる。

だが実際の連携はうまくいかなかった。やや時期は下るが、1854年に楊秀清は上海の李聞風なる人物に充てて次のような檄文を送ったと言われる。

けだし聞くに時の務めを識る者は英雄であり、進退を知る者は俊傑である。昨今の大局を觀るに、真主が天王であることを知るべきである。

三月に欽差大臣である羅大綱が報告してきたところでは、なんじらは[太平軍が]蘇州、常州を攻め、なんじら自身は上海にあって内応することを願っているとのことであった。

本軍師は喜びと安堵に堪えなかったが、いかなる理由で遷延して今日まで至っているのか？もし衆を率いて来たりて軍に加わるのであれば、必ず奏請して爵位に封じよう。どこへ行き誰に従うか、みずからこれを諒解されんことを願う⁵³⁾。

この檄文は太平天国が出した他の檄文とは様式が異なり、原文そのまま考えることはできないが、上海小刀会から太平天国に対して東進の要請があったものの、その後事態が進展しなかったことがうかがわれる。

実のところ太平天国は江蘇東部への進出を試みていた。清軍による長江下流の封鎖が厳しいと見た楊秀清は、南京上流にある安徽省の蕪湖から軍を東進させ、高淳県の東壩（広通鎮）を經由して常州へ進出する作戦を立てた。

1853年11月初めに太平軍は蕪湖県の灣址から船数百隻で東進したが、向榮は総兵徳安および解任処分を受けていた鄧紹良の兵勇2,200名を東壩へ送り、すでに東壩に配置していた兵と共に太平軍を攻撃させた⁵⁴⁾。その後清軍が捕らえた太平軍兵士は「命令を受けて高淳、東壩から真っ直ぐに常州を攻め、鎮江城の賊と期日を決めて常州を衝く」つもりだったと供述した。また鎮江城内の太平軍も南進の構えを見せ、出撃したところを已革湖南提督で新たに鎮江へ派遣されていた余万清の軍に撃退された⁵⁵⁾。

さらに1854年8月に羅大綱は丞相曾水源と共に自ら軍を率いて蕪湖から東壩へ向かって進攻した。だが副將傅振邦らの率いる清軍と激戦となり、多くの被害を出して作戦は失敗した⁵⁶⁾。その後11月に西征軍が湖北の田家鎮で湘軍に大敗すると、羅大綱は翼王石達開と共に救援に向かい、1855年1月以後は江西湖口県一帯で活動した⁵⁷⁾。鎮江の守備はやはり検点に昇進していた呉如孝が引き継いだ。鄧紹良率いる清軍の抵抗に遭って東進することは

出来なかった⁵⁸⁾。1855年2月には上海小刀会も敗北し、両者の連携は失敗に終わった。

インフォーマルな対外交渉の窓口としての役割を期待された鎮江の太平軍は、結局のところ現地機関としての成果をあげることは出来なかったのである

二、太平天国の揚州における戦いと釐金制度

(a) 揚州をめぐる太平軍と清軍の攻防

さて長江北岸にあたる揚州の動向はどうであろうか。現在見ることが出来る史料から、太平天国が揚州へ軍を進めた目的を正確に把握することは難しい。杜文瀾『江南北大営紀事本末』は「揚州賊酋の林鳳祥らは偽指揮の曾立昌を留めて揚州を守らせ、ことごとく婦女を駆り立て、金帛輜重を運んで金陵へ戻り、自らは二十一軍の賊を率いて北竄した⁵⁹⁾」と述べており、これに従えば北伐作戦の後方基地として揚州に軍を置いたことになる。のちに曾立昌は揚州を撤退し、北伐援軍として北上したことを考えれば、この見方は大筋において当たっている。

だが史料の中には、南京にいた首領クラスの王が揚州を訪れたと述べるものもある。倪在田『揚州禦寇録』はその一つで、「巨賊楊秀清が揚州に至った」と記している。このとき楊秀清は揚州城の要塞化を進め、近隣の民に貢ぎ物を献げさせて城内の備蓄を増やした。また住民を男女に分けて組織化し、「好道理」を行って礼拝に参加させたという⁶⁰⁾。これらの記載を見る限り、太平天国は揚州を長江北岸の拠点として統治する意志を持っていたことになりそう。

それでは実際はどうだったのか。琦善の上奏によると、1853年5月7日に琦善、勝保、陳金綬らは揚州の西北から城を攻撃し、城外に設けられた土城3カ所を破壊した。太平軍は一度城内へ退き、まもなく北門から2,000人が出撃して応戦したが、清軍はこれを攻撃して陣地4ヶ所を焼いた。翌日も戦闘は続けられ、清軍は「広西老賊」300人、湖広などの出身者2,000名を殺害したとある⁶¹⁾。

5月初めに林鳳祥らがいったん南京へ戻り、長江対岸の浦口に上陸して北伐を開始すると⁶²⁾、琦善らは六千斤の大砲14門を取り寄せて揚州城内へ砲撃を加えた。だが砲の口径が小さすぎるなど造りが悪かったために弾がそれてしまい、効果はあがらなかった⁶³⁾。5月23日に清軍は城の北面、西面から攻撃を行い、濠を埋めて城壁に近づこうとしたが、太平軍は城壁の上から銃の一斉射撃を行い、また木材や石、レンガなどを落として抵抗した⁶⁴⁾。さらに27日に清軍は砲撃によって揚州の城壁に穴を開け、そこから突入しようとしたが、抵抗する太平軍に阻まれて失敗した⁶⁵⁾。6月6日に揚州の守備を任された指揮曾立昌、指揮陳世保は北門から出撃して清軍の大砲を破壊しようとしたが、肅州鎮総兵双来の軍に敗北して3,000人が殺された⁶⁶⁾。

このように見ると、揚州一帯では太平軍と清軍のあいだで激戦が展開されたように見えるが、実際の状況はかなり異なっていた。

倪在田『揚州禦寇録』によると、この頃長江北岸の儀徵県を守っていた太平軍首領の黄徳生は、清朝側の働きかけに応じて瓜洲の太平軍軍船を使用不能にし、南京へ行って楊秀清を殺害する計画を立てた。勝保は琦善に揚州と瓜洲の連絡ルートを絶つように申し入れたが、琦善は「わが兵は怯えている」と言ってこれを認めず、自分の許可なく城を攻めたり、太平軍と交戦する者は斬るとの命令を下した。その結果清軍の「諸将はみな手をこまねいているだけで奮うことができず」⁶⁷⁾、黄徳生は計画が漏れて殺された。

また南京で江南大営を率いていた向荣は、5月に四川勇数百人を揚州府城に潜入させ、内外から城を攻める作戦を立てた。彼らは城内に入り、住民の協力を得て太平軍將兵を殺したが、「琦善は応じず」、憤慨した四川勇は翌日城を脱出して攻撃は失敗した⁶⁸⁾。当時向荣の上奏にはこうした記載はなく、むしろ兵力不足を理由に長江北岸への派兵を断っており⁶⁹⁾、どこまで事実かはわからない。ただし琦善と勝保のあいだで意見の対立があったのは事実で、琦善は6月の上奏で勝保が揚州を離れて安徽の救援に向かうことを求めた⁷⁰⁾。勝保も北伐軍の追撃に積極的で、6月18日に兵1,900名を率いて河南へ出発した⁷¹⁾。

このほか長江北岸には直隸提督陳金綬、漕運総督楊殿邦、江南河道総督の楊以増らが軍を率いて駐屯していた⁷²⁾。また新たに四川総督慧成が兵2,000名弱を率いて揚州北東の邵伯に到着し、6月5日に護理漕運総督の查文経が率いる滁州勇と共に揚州城の東門を攻めた⁷³⁾。このように多くの司令官が軍を率いたことは指揮を混乱させ、將兵の訓練不足、戦意の低さもあって攻撃ははかどらなかつた。

琦善の上奏によれば、清軍は6月以後も揚州城への攻撃をくり返した。太平軍は破壊された城壁を補修し、3人1組の兵士を交代で持ち場の守備に当たらせた。また太平軍の軍船が瓜洲、鎮江と南京の間を頻繁に往来し、清朝の水軍はこれを防ぐことができなかつた⁷⁴⁾。6月18日には城内へ打ち込まれた砲弾が昼食を取っていた広西、湖南出身の太平軍將校を直撃し、7人を死亡させた。また投降をよびかける布告を貼り出し、応じた者には長髪か短髪かの区別なく罪を赦し、官職を与えることを約束したと述べている⁷⁵⁾。

実のところ清軍が熱心に取り組んだのは、揚州城を出て外部と連絡を取ろうとする太平軍密偵の摘発や、太平軍に物資を売りに来る近郊住民の取り締まりだった。琦善は次のように報じている。

私が揚州城へやって来た当初、聞くところでは城内で賊に脅された人は死党を除いてみな逃散したいという心を持っているが、捕らえられて殺されることを恐れ、なお躊躇して決断できていないとのことだった……。

最近捕らえた密偵の供述によると、賊がひとたび出撃すれば、脅されて従っている者はすぐにわが軍に投じ、たちどころに解散してしまうので、賊は城を死守し、防禦を厳しく固めて、住民は一人たりとも出入りすることを許さなかつた。また死党に服装を変えさせ、城壁を下って密偵としてわが軍の様子を探らせた……。

〔戦闘のために〕揚州城外の民家は焼き払われたが、残った木材や什器を僅かな利益を求める者どもが運び出している。賊はやってくる貧民が日に増えているのを見て、城壁の下から外へ向けて穴を掘り、城壁の上からも衣服などを下ろして民に取りに来るように誘っている。賊はまた隙に乗じて城から出て、頑丈そうな貧民を脅して賊の助勢をさせている。中には米や麵、野菜を携え、城下へ行って衣服と交換する不肖の奸民もあり、良民、悪人の区別が難しいので、禁止して厳罰を加える他はない⁷⁶⁾。

ここでは揚州城内へ立てこもった太平軍が、住民を軍に編入して逃亡を許さなかったこと、城内外に残された衣服や物資を使って周囲の住民を誘い、食糧を調達していたことがわかる。これは琦善の報告とは裏腹に激しい攻城戦が行われなかったことを示唆しており、太平軍は密偵を放ったり、食糧を売りに来た住民の協力を得て清軍の動向を探っていた。

こうした現実を前に、清朝側にできることは多くの兵力で揚州城を取り囲み、城に近づく住民を殺して「戦果」として報告すると共に、食糧の補給路を断って兵糧攻めに持ち込むことだった。また清軍は「招降大旗」を掲げて城内の住民に城を出るように誘ったが、太平軍は城壁の外に鉄釘を張りめぐらせた大木を配置し、攻撃する清軍兵士が近づくことも、脱出しようとする住民が城壁を降りることも出来ないようにさせたという⁷⁷⁾。

(b) 雷以誠の練勇と釐金制度の創設

6月23日に清朝は北伐軍の追撃に向かった勝保に代えて、刑部侍郎の雷以誠を幫辦軍務に任命して琦善、陳金綬の揚州攻撃を補佐するように命じた⁷⁸⁾。雷以誠は湖北咸寧県人、太平軍が武昌攻撃に取りかかろうとしていた1852年12月に彼と密接な関係にあった王家璧（湖北武昌県人）の「通籌禦賊急務」に関する秘密の上奏文を代わって提出した⁷⁹⁾。

その後彼は黄河の渡口を「巡查」し、都察院左副御史となって清江へ赴き、山東兵の人数削減を行って費用の節減に努めると共に、大運河沿いの各地で団練の視察や密偵の摘発を行った。また揚州府城の東10キロ程にある仙女廟へ至り、ここで練勇3,000人を組織して太平軍と対峙した⁸⁰⁾。

この頃、長江北岸の清軍は多くが江蘇徐州の糧台から軍事費の供給を受けていたが、北伐軍の進撃に対応するために多くの兵力が投入されると、江北大営の支出まで支えられなくなった。また各地に援軍を派遣した結果、琦善や陳金綬らが直接率いる兵力が不足し、これを補うための部隊を支える兵站が必要になった。その結果雷以誠が提唱したのが釐金制度である。

この釐金については1853年7月から秋にかけて、雷以誠が幕僚だった銭江（浙江長興県人）の献策を受けて新たに創設した物品通過税（国内関税）とする見解が一般的である。だが簡又文氏は、釐金が資金調達の方法として古くから行われており、銭江はこれを軍事費に転用することを提唱した可能性が高いと指摘している⁸¹⁾。そこで7月2日に出された雷以誠

の「捐局を擬設してもって輸將に便ならしめ軍需を済す」なる上奏を見ると、次のように語られている。

粵匪が江南へ竄擾すると、各路の大兵が雲集し、兼ねて壮勇を募って協剿させたため、軍餉は浩繁となった。支出は膨大となり、経費は不足している。さきに陛下の命を受け、籌餉の事例に照らして二割を削減し、近場の軍営で納入させ、支給して実収させた。部へ赴いて証明書（原文は照）に換え、もとより簡易に帰して体恤を示した。およそ好義急公の士は、まさに踴躍として楽輸すべきであったが、今月に至るまで、陣営に赴いて寄付を行う者は寥寥たる有様である。

その原因を推し量るに、みな昇平日久しく、民は兵を知らない。もし彼らを軍営へ赴いて捐輸させても、毎回多くは金を持ったまま尻込みし、觀望して前へ進もうとしない。必ずすべからく専ら捐局を設けるべきである。願わくば広く招いて、公事を一つに帰着させて錯乱させてはならない。

私は先日巡閱で泰州へ至り、ここが裏下河の各州県から行き来するのにも必經の道であることを知った。まさに城内に取捐総局を設立すべきである。その高宝各州県は泰州から離れることやや遠いので、宝応地方に別に一局を設ける。私から有能な委員を派遣し、局務を総理させれば、捐納を行う生員（捐生）の都合に合わせて現地で寄付を行うことができる。彼らが踴躍として寄付するのが期待でき、軍事費の調達にも利益があるだろう。

その寄付を行う報捐の章程については、つつしんで諭旨に従い、籌餉の例にならって現行の通例の銀数から二割を減らすことにする。銀錢であれ、米であれ均しく納入を認める。ただこれらの寄付の受け取りは、現地で軍事費を調達することを配慮し、必ず特別に体恤を示し、もって陛下の仁を広め激勸を示さなければならない⁸²⁾。

ここで雷以誠は清軍の兵糧不足を解消するため寄付を募ったが、江北大営など清軍の陣地に足を運ぶ者はなく、交通の要所に局を設けて費用の捻出を図るべきだと主張している。とくに揚州の東に位置する泰州府城に取捐総局、大運河を北上した宝応県にも別に局を設け、献納を受けつけるように求めた。

続く8月3日の上奏では、組織した練勇の食糧や火薬、軍装、武器を調達するため、宝応、泰州に捐局を設けて「軍餉を助ける」ことにしたが、「最近泰州の民情は驚懼し、報捐する者は甚だ少ない」と効果は上がらなかった。そこで同地の地丁銀、漕米などから費用を捻出して「解営応用」⁸³⁾するように求めた。

さらに8月31日の上奏は「現在の情形を体察して捐輸章程を酌擬し、部議に遵照して核実覆奏す」というタイトルで、軍事費調達のための献納制度を実行した様子について語っている。それによると泰州の捐局は前湖南桂陽州知州の兪昌会、宝応のそれは南河候補同知孔

繼鏐が管理し、江都県の万福橋に駐屯した雷以誠と半月に一度「捐冊」を送って連携した。捐輸章程については告示を刊刻して裏下河沿岸の各県に貼り出させ、「経手人」が「需索」することを防いだ⁸⁴⁾。

実際に捐輸が始まると、銭で寄付する者が多かった。軍営の支出は銀で行うため、銀で納入したものについては、なるべく金額が目減りしないように努めた。また本来は米で納入することを認めていたが、夏は湿気によって米が変質する危険があった。そこで穀倉地帯の下河では秋の収穫後に米で納めることを認め、市価に照らして銭に換え、さらに銀へ換算した⁸⁵⁾。また当時は戦乱の影響で住民や商人が避難し、銀と銭の換算率が一定しなかったため、銀1両を銭1,600文で固定するように求めた⁸⁶⁾。

ここで示された軍事費調達の方法は物品通過税ではなく、あくまで科挙受験生や商人による王朝政府への寄付行為として位置づけられている。だが交通の要所に官吏を派遣して資金を管理させた以上、それは強制力を伴う税の徴収へと転化することは不可避であっただろう。

1854年4月になって雷以誠は「商賈に捐釐助餉」させる方法を広く行うように求めた。ここで彼は「前年の夏に裏下河に局を設けて勤捐し、藉りて壮勇を訓練して東路を守った」が、人々の「精力はすでに枯渇し、誠に恐らくは途切れなく接濟することは難しい」と指摘した。そして「私は昼夜思惟し、その民に損とならず、餉に有益で、かつ久しく実行して民に便利なのは、各行の商賈に捐釐させる一法以外にはない⁸⁷⁾」とあるように、同業組合である「行」の商人を対象として資金を献納させることを主張した。

また雷以誠は穀倉地帯である裏下河は米が多く価格も安いので、揚州府城に近い仙女廟、邵伯、宜陵、張網溝の各鎮で、かつて「総督」の林則徐が行った「一文願の法」に倣って米商人の組合に「捐釐助餉」を行わせた。米一石ごとに五十文を納めさせ、一升あたり半文に留めて、民生に影響が出ないようにした。1853年10月からこの制度を試験的に行ったところ、数カ所の米商人が献納した金額は銭二万貫に及んだという⁸⁸⁾。

このほか1853年9月の上奏によれば、雷以誠が裏下河の12州県で「捐資団練を行うように紳董に勸諭」した結果、各県で数千から1万人の「団練」が組織された。それは水勇、陸勇あるいは官勇、民勇の区別があったといい、実際は傭兵部隊であったと思われる。泰州などでは「心を合わせて賊を殺そう（齊心殺賊）」と記された旗をかかげ、密偵を摘発するための巡回を行ったという⁸⁹⁾。

また12月の上奏によると、「設局収捐」を円滑に行うために銀1両を銭1,600文で換算することが認められると、泰州、宝応の委員となった兪昌会、孔繼鏐らが献納を行った者の姓名と官職、金額を報告してきた。両地方で献納された金額は銭22万文以上にのぼり、徐州糧台からの補給を受けられなかった雷以誠麾下の練勇4,000名の兵糧に充てられたと述べている⁹⁰⁾。

(c) 揚州東部における戦い

こうした記載を見る限り、雷以誠が揚州一帯で行った練勇の組織と兵餉調達のための釐金制度は効果をあげたように映る。また彼は練勇が清軍と協力して揚州の太平軍に打撃を与えたと報じたが、それはどこまで事実だったのだろうか。

例えば7月3日に雷以誠が派遣した塩知事銜張翊国の率いる壮勇200名は、肅州鎮総兵双來が率いる陝西兵と共に雲梯を用いて揚州府城の城壁に登り、攻撃を行って太平軍將兵600人以上を殺した。だが他の清軍部隊は「諸將は多くが永安州を前車の鑿とし、ゆえに未だあえて深入りしようとしな」とこれに呼応せず、張翊国、双來は共に負傷して攻撃は失敗した⁹¹⁾。

7月5日に瓜洲の東にある虹橋の紳士董事だった鍾淮らは、「団練民勇」を率いて水陸から瓜洲へ攻撃をかけた。だが太平軍の挟み撃ちに遭って敗北し、鍾淮が戦死したほか多くの死者を出した⁹²⁾。この頃琦善は雷以誠と面会し、江北大營へ移動するように求めたが、雷以誠は現在なお「勸捐募勇」の任務が完了していないため、引き続き万福橋に駐屯すると言って応じなかった⁹³⁾。清軍司令官同士の間接交渉の悪さがうかがわれる。

また新任の漕運総督として約8,600名の兵力を引き継いだ福済は、虹橋を含む揚州城の東北に陣を敷いた⁹⁴⁾。だが7月20日に太平軍が虹橋の山東兵陣地を攻撃すると、先の戦闘で指導者を失っていた「団練民勇」は呼応できず、福済が送った兵200名も逃亡して清軍は敗北した⁹⁵⁾。

続く7月23日に総督慧成麾下の参将師長鏞らは「楼船」に兵を乗せて揚州の東路を攻めた。だが東岸で呼応する筈だった参将馮景尼の到着が遅れたため、清軍は鎮江からの援軍7,500人を得た太平軍によって船を焼かれ、上陸することが出来なかった⁹⁶⁾。またこの日琦善は双來および鄖陽鎮総兵の瞿騰龍に揚州城の北門を攻めさせたが、攻撃は失敗して再び重傷を負った双來は死亡した⁹⁷⁾。

これらの事実からは、清軍の司令官たちが連携を欠いたまま攻撃を命じ、いたずらに損失を増やしていた様子がうかがわれる。雷以誠自身も8月3日の上奏で次のように指摘している。

琦善、陳金綬は兵七千余名を擁しているが、ただ揚州城の西北に駐屯して攻剿に努め、三岔河一帯を防守するだけで、城の東側を顧みることが出来ない。私が新たに募集した練勇は三千余名で、もし仙女廟を守るだけなら、士気を高めることによって少数で多数に立ち向かうことは難しくない。

だが私はすでに幫辦軍務に任命され、揚州城の奪回を目指している。毎回の攻撃で私は必ず壮勇を率いて琦善、福済と犄角の勢いをなし、三面から進攻している。

また私が万福橋の陣営に残している練勇は千人に足りず、多くが勇気を奮って賊を殺そうと願ってはいるものの、いまだ戦場へ赴いた経験がない。その他要所を守備してい

る団練の壮勇は、数こそ一万人いるものの動員することは難しい。守るには余りがあるが、戦うには足りない。もし瓜洲や揚州へ出撃しようとしても、実に兵力が足りないのである⁹⁸⁾。

ここで雷以誠は琦善、陳金綬の軍が城の西北を攻撃するに止まり、東側については手が回らないこと、雷以誠が率いる練勇の兵力は多いものの、経験不足から城の東北にいる福済と連携して攻勢をかけるのは難しいと述べている。福済も勝保、慧成が「精兵数千」を率いて北伐軍の追撃に向かったため、城の東北の兵力が足りず城内から太平軍の出撃を許していること、瓜洲方面も事態は同様で、太平軍は揚州城内との連携を図っていると指摘した⁹⁹⁾。そして二人は勝保、慧成の軍を急ぎ揚州へ戻すか、新たに増援の兵を派遣するように求めた¹⁰⁰⁾。

いっぽう揚州の東側に手が回らないことを批判された琦善らは、現存の兵力は5,700名程度に過ぎず、自分たちは揚州府城および大運河沿いで揚州と瓜洲の中間に位置する三汊河をくり返し攻撃していると主張した¹⁰¹⁾。また7月20日の虹橋での敗戦の原因について、練勇を率いていた淮安府知府福楙が「督率に方法がなく、紀律を講じなかった」¹⁰²⁾のために練勇の潰散を招いたと告発した。

これに対して雷以誠は先に琦善の陣営を訪ねた時、琦善は具体的な方策については何も言及しなかったこと、彼は揚州近郊の住民を退去させて食糧の補給路を絶ち、8月9日から五台山に大砲を備え付けて砲撃を行ったが、突然琦善から自分と福済が「各々畛域を分けている」¹⁰³⁾と指弾を受けたと反論した。

この頃、山東の黄河北岸から再び揚州へ向かうように命じられた慧成は、攻城戦は「下策」であり、兵糧攻めによって「自潰」に追い込むべきだが、兵力不足によって包囲網が完成できていないと指摘した。また雷以誠が編制した練勇は「遊惰な烏合」がその大半を占めており、補助兵力として用いることは可能でも、攻撃の主力として用いることは決して出来ないと述べた。さらに福済の軍も正規兵は700人ほどで、残りは全て練勇であり、東路の兵力では揚州の太平軍が北進を始めた場合防ぎきれないと訴えた¹⁰⁴⁾。

実のところ、この時期揚州の東路に動員された壮勇には、後に「潰勇」となって泗州高家集に盤踞し、清軍の弾圧を受けた李興清（李三閩）のような勢力もいた¹⁰⁵⁾。だが倪在田『揚州禦寇録』によると、虹橋の董事だった鍾淮は「巨商」の子だったため、琦善は彼に練勇の兵糧や武器を自弁させただけでなく、他の官僚と共に賄賂を要求した。その結果待遇に不満な練勇は「密かに賊と結び、笠で槍を覆うのを目印にした」¹⁰⁶⁾とあるように、太平軍と内通して戦わなかった。

また倪在田によると、雷以誠が動員した団練は「壮年や老人、子供が鋤を担ぎ、竿を掲げた」とあるように戦闘に耐えられる状態ではなかった。だが彼はこれを露払いとして攻撃の先頭に立たせ、清軍はその後に続いた。はるばる里正に率いられて戦場へ投入された彼らは

多くの犠牲者を出し、「郷農は枕を安んずることなく、士大夫は深いため息をついたが、雷以誠はついに悟らなかった」¹⁰⁷⁾という。

慧成は練勇について「銭が多ければわが用となるが、銭が少なれば賊に用いられる」¹⁰⁸⁾と述べたが、その実練勇の置かれた過酷な待遇こそが彼らが戦果を挙げられなかった原因だったと言えよう。

さて清軍の揚州に対する攻撃が進展しない中、総司令官であった琦善に対する批判の声が強まった。10月6日に河南道監察御史の范承典は、琦善が「久しく功績がなく」、これ以上時間を無駄にすることは許されないとして、彼を更迭して「民の苦しみを救ってほしい」とする上奏を提出した。

それによると、琦善はアヘン戦争の条約締結時に受けた処罰が不満で、欽差大臣として太平天国の鎮圧を命じられた時も、故意に前進を遅らせたために南京の陥落を招いた。そして「現在揚[州]城の賊匪は僅か千人余りに過ぎないが、琦善は兵を按じて動かず」とあるように、ただ形を取り繕っているだけで、この一ヶ月でも戦果は数える程に過ぎないと述べた。

また范承典は清軍が揚州を奪回すれば、琦善は必ず南京を攻めることになり、さらには江西へ派遣されることを知って、巧みに難を避けていると指摘した。また戦って敗北すれば司令官である彼が責任を問われるが、補給が続かずに軍が潰えれば兵餉を担当する官吏が処罰されるため、琦善は他人に責任を押しつけているのだと述べた。そして現在江南大營の向荣や南昌攻防戦を率いた張芾、懷慶で北伐軍と対峙した訥爾經額がいずれも処罰を受けている中で、琦善一人が罪を免れているのは不公平であり、琦善を解任するか、「親信の王大臣」を派遣して軍を監督させるべきであると主張した¹⁰⁹⁾。

ここで琦善が決定的な敗北を恐れ、積極的に戦おうとしなかった点については、『揚州禦寇録』も指摘している。例えば8月に行われた三汊河の戦いで、「歴戦して兵を知る」都司の毛三元は運河に浮き橋を作り、太平軍を誘い出す作戦を立てた。太平軍が浮き橋に軍を進めると、毛三元はこれを攻撃して勝利したが、琦善は毛三元を「功勳を貪り上官の命令に従わなかった」罪で弾劾したという。倪在田は「琦善は貪狡残傲の四つを兼ねており、下層の官員や勇敢な兵士が果敢と戦えば、必ずこれを死地に追いやり、あるいは座視して救わないか、強引に陥れた。陣亡した将校たちは半ばがこうして殺された」¹¹⁰⁾と述べている。

当時漢人官僚や読書人のあいだには、林則徐の解任後にアヘン戦争終結の条約交渉を行った琦善に対する反感があった。また太平天国の進撃を防げなかった漢人官僚に厳しい処分が下されたのに対して、賽尚阿など旗人官僚に対する処罰が充分でないという不満が根強く存在した¹¹¹⁾。

7月に張翊国、双来が揚州の城壁に登って攻撃した時、琦善は「西路の兵」が支援を怠ったことへの監督責任を問われて革職留任の処分を受けた¹¹²⁾。だがその後9月中旬までに清朝が琦善に下した上諭は、「諸軍を総統し、督率して圍攻し、迅速に克復を期せ」¹¹³⁾、「その揚州東北一帯は、雷以誠、福済がくり返し『勇が多く兵が少ない』ことを理由に増援を求め

ており、実際の情形であろう。琦善は全局を統籌し、奕経、容照らの率いる官兵から酌量して動員して応援に向かわせ、賊匪をして隙に乗じて竄逸させないことが重要である¹¹⁴⁾といった内容が中心だった。その語調も比較的冷静で、北伐軍の直隸進出を許した直隸総督の訥爾經額や山西巡撫の哈芬らに厳しい叱責を浴びせたのとは異なっていた。

また9月30日の上諭は「琦善は総統であり、陳金綬、雷以誠は共に幫辦、慧成と福済は督兵協剿の任を負っている……。もし管轄地にこだわり、心を合わせてこの窮寇を滅ぼせないなら、彼らがどこから竄出するのであれ、該大臣らは罪を免れることはできない。半年以来、いたずらに兵を損ない食糧を浪費し、小さな揚州の城を迅速に奪回出来ないでいる。どうして賊匪が全て逃げ出し、他の地域へ進出するのを座して待っていて良からるか？」¹¹⁵⁾と述べており、やや強い調子で太平軍が揚州から他地域への進出することを防ぐように指示していた。

つまり当時の清朝にとってより切迫していたのは北方の戦況であった。揚州の太平軍が城内に留まり、北伐軍と呼応する形で移動を開始しない限り、江北大営は一定の役割を果たしているを受け止められていたのである。

(d) 太平軍の揚州退出とその影響

さて揚州の戦況が膠着状態を続ける中、籠城する太平軍は大きな問題に直面した。食糧が不足し、また外地との連絡が寸断され始めたのである。

『揚州禦寇録』によると、揚州城内の太平軍で食糧が不足し始めたのは5月頃であったという。城内から脱出してきた住民が「賊の食物はまさに尽きようとしており、多くが官軍の格好をして、北へ脱出しようとしている」¹¹⁶⁾と語った。それは難民を装った太平軍の密偵であったと思われ、清朝側が城の北側の警備を強化したため、城と瓜洲を結ぶ南側の警備はかえって疎かになった。

次に揚州城内の食糧不足が伝えられたのは7月のことで、曾立昌は住民が皮製品を煮て食べていることを知り、南京の楊秀清に救援を求めた。すると楊秀清は南京の長江対岸である浦口の守備隊を瓜洲へ向かわせ、ここの太平軍と共に虹橋を攻撃して食糧を確保しようとしたという¹¹⁷⁾。

実際に揚州の食糧が不足し始めたのは、8月に琦善が三汊河など城の南側に兵を配置し、瓜洲との連絡ルートを遮断してからだった。また福済が「城の付近に住む貧民をことごとく引き払わせた」¹¹⁸⁾ため、太平軍は住民から物資の供給を受けることが難しくなった。9月13日の琦善の上奏は次のように述べている。

五月（6月）下旬以来、官兵は四面から環攻すると、この逆匪はただ孤城を困守し、險要の地に籠もって抵抗した。城内の蔬菜は久しく絶えたが、倉庫に貯蔵された穀物は多い。また賊は搜括に秀でており、民間の僅かな貯えでも奪われてしまう。しばしば食

糧の不足が伝えられたが、現在も城上で守備をしている賊は飢えに苦しんだ顔をしていない。

火薬については、やはり足りていないとの情報があったが、城の上から放たれる銃砲の音は止まず、それほど不足している訳ではないことがわかる。聞けば賊匪は火薬に用いる硫黄も豊富で、日夜壁の煉瓦から硝石を作り、火薬を製造している。ただしその補給を絶てば、城内の米、火薬は必ずや日一日と少なくなる。城外に住んでいた住民は、私共がすでにことごとく駆逐したので、この先は米一粒たりとも城に入ることはない¹¹⁹⁾。

この上奏で琦善は揚州城内の食糧不足を否定しているが、その根拠となる太平軍の総数も、大運河を用いて北京へ送られる筈だった漕米など備蓄されていた穀物の量も正確に把握していない。彼とその側近たちは情報収集の面で天津郊外や連鎮で北伐軍と対峙した勝保や僧格林沁に及ばなかったことがわかる¹²⁰⁾。また彼の考えは損失の大きな攻城戦は行わず、兵糧攻めによって「自潰」に追い込むべきという慧成の主張に近いものであった。

9月21日に慧成は揚州城東の湾頭にある福済の陣地へ到着して指揮官たちと会見した。そして城内から脱出した難民の供述から、備蓄されていた食糧はまさに尽きようとしており、住民の協力者を派遣して瓜洲の太平軍と連絡を取り、南京から「迅速に匪を派遣し、米を揚州へ運び供給する」ように求めたことを知った。だが楊秀清は「[南京の] 防衛は急務であり、賊を分けて救援することは出来なかった。そこでやむを得ず瓜洲の匪徒から数千人を出して、米船を護送して揚州へ至る」ように命じた。当時瓜洲に駐屯していた呉如孝は、満潮となる9月22日に揚州へ向かい、三汊河で放たれる砲声を合図に城内の太平軍が呼応し、各門から出撃して清軍を牽制する作戦を立てたという¹²¹⁾。

この動きを察知した慧成と琦善は兵を派遣したが、太平軍は姿を見せなかった¹²²⁾。だが10月初めから瓜洲と揚州城内から度々太平軍が出撃し、物資の輸送ルートを確認しようとした¹²³⁾。すると琦善は雷以誠、慧成らと協議し、揚州城の外側に設けた砲台の高さを上げ、城内を見渡せる位置から砲撃出来るように工事を始めた¹²⁴⁾。この工事は10月24日に完成し、長さ50メートル、城壁よりも3メートル高い砲台には大小の大砲40門が据え付けられた¹²⁵⁾。翌日砲撃が始まると、城内では家屋が損壊し、悲鳴があがった。26日も砲撃は続き、太平軍は数百人規模で城を出て砲台を破壊しようとしたが、清軍によって撃退された¹²⁶⁾。

その後も太平軍は揚州城内からしばしば出撃し、砲台を破壊しようとしたが成功しなかった¹²⁷⁾。11月1日に咸豊帝は、琦善が10日間に1度の上奏で責任逃れをしていると述べたうえで、「双来が戦死して以来、攻城の話はいたずらに空言となっている」¹²⁸⁾と攻撃の遅れを非難した。そして向荣に対して提督の和春、江蘇巡撫の蘇布通阿のどちらかを江北へ赴かせ、琦善の軍と協力して迅速に揚州城を奪回するように命じた¹²⁹⁾。

これに対して琦善は、現在正規兵は4割以上が他地区の救援に向かい、城の包囲や三汊河での戦闘で活用できる兵力は6~7,000人に過ぎない。また揚州城の周囲には堅固なバリ

ケードが築かれており、出撃してきた太平軍を撃退することは出来ても、城内へ突入することは不可能に近い。目下城の周囲に砲台を設け、砲撃を続けているが、兵糧は不足し、補給に関する知らせも届かない。むしろ三汊河で瓜洲の太平軍と対峙している総兵瞿騰龍を安徽廬州の救援へ赴かせるのを待ってほしいと要請した¹³⁰。

これらは揚州の戦況が膠着状態に入り、太平軍、清軍共に局面を打開する方法を見いだせなかったことを示している。

11月下旬、呉如孝が鎮江へ戻った後に瓜洲の守備を担当していた尹謙吉は、援軍を求める南京へ使者を度々送った。これを受けた楊秀清は南昌攻撃に失敗して南京へ呼び戻された丞相頼漢英（洪秀全の妻の弟）、南京城内の守備を務めていた検点永錦発に兵 6,000 人、160 隻の船を率いて揚州へ向かわせた¹³¹。

この救援軍は「瓜洲へ至ると、その将兵を率いて三汊河を攻め、数十におよぶ陣地を築」¹³²いた。はじめ彼らは偵察の軍船を出すなど慎重に前進していたが、12月2日に4～5,000人の規模で三汊河の清軍陣地を攻撃した¹³³。清軍は応戦し、8月の戦いで活躍して游撃に昇進していた毛三元らは上下二層からなる陣地を設け、攻め寄せる太平軍を撃退した¹³⁴。だがこの日儀徴県の沙漫洲にも太平軍の別働隊が上陸し、翌3日に儀徴县城を占領した¹³⁵。

12月4日に揚州城内の太平軍4～5,000人が南門から出撃し、3手に分かれて清軍の砲台に攻撃をかけた。この時瞿騰龍、副都統銜侍衛の徳興阿（後に欽差大臣となる）は三汊河から救援に向かい、太平軍将兵500余人を殺して城内へ追い返した。太平軍は他の門からも出撃したが、査文経は参将馮景尼らにこれを撃退させた¹³⁶。

いっぽう三汊河では4日に瓜洲の太平軍が攻撃をかけ、瞿騰龍、徳興阿らに撃退された。翌5日に太平軍は大運河西岸の土手に砲台を構築し、対岸の清軍へ向けて発砲した。すると瞿騰龍らは毛三元に浮き橋を作らせ、これを渡って琦善の派遣した援軍と共に砲台を攻撃し、太平軍将兵2,000余人を殺した。昼になって太平軍の軍船が進撃を始めたが、清軍はこれを焼き払った。三汊河で火の手が上がるのを見た城内の太平軍は呼応すべく出撃したが、再び清軍に撃退された¹³⁷。

その後12月中旬にかけて太平軍と清軍は揚州と瓜洲、儀徴県を結ぶ大運河の西側で攻防をくり返したが、決着はつかなかった。すると頼漢英らは揚州の東側の守備が手薄であることに気づき、攻撃の矛先を大運河の東側に位置する楊子橋に定めた。

12月24日に三汊河の西へ兵を送って瞿騰龍、徳興阿の軍を牽制した頼漢英は、尹謙吉に命じて楊子橋に駐屯していた馮景尼の壮勇陣地を攻撃させた。寝込みを襲われた壮勇は「全営が驚潰」して壊滅し、救援に向かった参将師長鏞らの軍も敗れた。「潰散」した壮勇たちは「賊が来るぞ！」と大声で叫びながら逃走し、住民たちが避難しようとした隙に略奪を働いた¹³⁸。

また楊子橋の南にある桂花荘には雷以誠が張翊国率いる練勇を駐屯させることになっていたが、24日に張翊国らが施家橋から前進してみると、すでに桂花荘に土城を築いていた太

平軍の抵抗を受けた。この時突然楊子橋から7~8,000人の兵が姿を見せ、張翊国らは「官兵が協剿」のため南下してきたと考えたが、後方に回り込んだ太平軍によって「前後夾攻」と挟み撃ちになった。さらに施家橋も太平軍の攻撃を受け、陣地を守っていた練勇は「陣亡すること過半」と大損害を受けた¹³⁹⁾。残りの練勇も食糧の補給が途絶えたために多くが「逃散」した¹⁴⁰⁾。

こうして揚州東路の清軍、練勇を打ち破った頼漢英らは、12月26日に東側の各門から入城した¹⁴¹⁾。清軍は太平軍がそのまま北上することを警戒したが¹⁴²⁾、曾立昌は急ぎ軍をまとめ、27日に住民を連れて瓜洲へ向かって退出した。その後衛部隊は「輜重、婦女を携帯し、騎馬の賊目がしんがりを務めた」が、清軍はこれを追撃しなかった。清軍は揚州城へ入ったが、郷勇たちは城内で略奪を開始し、城内に残っていた難民も次々と城から逃れた¹⁴³⁾。

こうして8ヶ月に及んだ揚州をめぐる攻防戦はひとまず終結した。だが長江北岸の要地だった瓜洲は太平軍が占據を続け、鎮江や南京の軍と呼応して1856年4月の江北大營の崩壊を招くことになった。また揚州を引き上げた曾立昌の軍は安慶で再編成され、1854年2月に北伐援軍として進撃を開始した。この援軍は山東省の臨清に到達したが、結局北伐軍と合流できずに壊滅した。

清軍が揚州を「収復」して間もない12月31日に清朝は次の上諭を下した。

琦善は全軍を統括して揚州の賊匪を攻剿したが、春から冬まで兵を擁しながら観望し、坐して彼らに四出衝突させた。近くはまた儀徴を失い、十日に一度小さな勝利の報告をするだけで責任逃れをしている。対峙して月日を重ね、食糧は枯渇し兵は疲れ果てた。これは誰の罪だと言うのか？

郷勇は元々烏合の衆であり、兵士とは異なる。ただ雷以誠が赴任した時、揚州の東路には官兵がおらず、練勇を募集して協剿させる他はなかった。しばしば練勇の統率者が戦果をあげ……、兵力の不足を補ったが、時間が経つにつれて油断が生まれ、紛々と潰散した。いったいどんな顔をして報告しているのだ？しかも賊衆がやってきた時、郷勇たちはなお眠りこけていたとは、全くもって情理の外である¹⁴⁴⁾。

ここで咸豊帝は江北大營の総帥である琦善が揚州の奪回に真剣に取り組まず、補助兵力であった筈の練勇の大敗を招いたことを厳しい調子で叱責している。この時練勇敗北の罪を問われた雷以誠は、「私は一介の書生に過ぎず、毫も見識がない……。[慧成は]私と意気投合しているが、願わくは琦善と和衷共濟できると良い」¹⁴⁵⁾と述べて琦善の独善的な態度を暗に批判した。また慧成は太平軍が大運河の東側へ攻撃をかけた時、西側にいた琦善は再三の催促にもかかわらず救援の兵を送らず、太平軍の北進を防ごうとした自分を死地に追いやろうとしたと告発した¹⁴⁶⁾。

こうした批判を浴びた琦善は、楊子橋での敗北後に解任処分を受けていた参将の馮景尼を

軍前で処刑した。また練勇を率いていた職員の張翊国、参将師長は共に新疆へ流刑となった¹⁴⁷⁾。だが現場の指揮官に責めを負わせる琦善のやり方は反発を招き、壮勇の頭目だった李興清（李三閩）は清軍から離反した。

だが結局のところ清朝は琦善を更迭せず、彼は 1854 年 8 月に揚州の軍営で病没するまで欽差大臣の地位に留まった。琦善は遺摺で「私は重い任務を背負いながら、迅速に賊を平らげることが出来ず、[揚州という] 一隅も平らげることも出来なかった」¹⁴⁸⁾と記した。彼は江南大営を率いた向荣と共に南京の太平天国と対峙し、長江を制圧できる水軍の強化を主張したが、その成果を見ることなく死去した。先に太平天国の鎮圧に失敗して処罰された賽尚阿や訥爾經額と同じく、重要な戦役で旗人を登用する清朝の伝統が最早通用しなくなっていたことを天下に示したと言えるだろう¹⁴⁹⁾。

おわりに

本稿は太平天国の鎮江、揚州への進出とその 1853 年末および翌年にかけての活動について検討した。当初これらの地への進攻は首都である南京にかかる軍事的な重圧を軽減する意図で行われ、一定の成果をあげた。また要塞化された鎮江は外国人宣教師が太平天国を視察する窓口となり、華夷思想を脱却できずに難航した南京での外交とは別の、現地レベルでの具体的な交渉を進める可能性をはらんでいた。また守將の一人だった羅大綱は元天地会首領であり、上海で蜂起した小刀会と連携する努力が行われた。

いっぽう揚州は北伐軍の主力となる林鳳祥らの軍が派遣されるなど、長江北岸に置かれた橋頭堡の役割が期待されていた。北伐軍が南京から進撃を開始した後も、揚州の太平軍は琦善による江北大営と対峙しながら、天津へ向けて援軍を送るための拠点となる筈だった。実際には曾立昌らが率いる揚州守備隊の人数は少なく、また清軍との長い戦闘で消耗も激しかったため、12 月に揚州を撤退すると安慶で軍の再編成が行われた。そして援軍の出発が遅れたことは、結果として北伐作戦そのものの失敗をもたらす結果を生んだ。

いっぽう鎮江、揚州あるいは瓜洲の太平軍と向き合った清軍の戦力不足は否定できない事実だった。鎮江を攻めた鄧紹良の軍は早々と敗北し、揚州では雷以誠が兵力不足を補うための練勇の編制に取り組んだ。またこれらの補助兵力は自弁が原則であり、雷以誠は兵糧獲得のために捐輸の慣行を活用し、商人を対象とする物品税である釐金制度を創設した。これはその後湘軍を初めとする義勇軍の戦費調達に大いに役立ったが、揚州の戦いに即して見れば、壮勇に依存した軍の敗北という結果を招いた。

このように見ると、鎮江と揚州の戦いは双方痛み分けという印象を与えるが、太平天国が大挙北上したり、江南全域へ進出することを免れたという点で清朝にとってまずまずの結果だったと言えるかも知れない。この状況は 1856 年の江南大営、江北大営の崩壊によって大きな転機を迎えるが、その詳細については別稿で検討することにしたい。

註

- 1) 菊池秀明『金田から南京へ——太平天国初期史研究』汲古書院、2013年。同『北伐と西征——太平天国前期史研究』汲古書院、2017年。
- 2) 菊池秀明『太平天国——皇帝なき中国の挫折』岩波新書、2020年。
- 3) 菊池秀明「暴力革命は肯定されるか——南京占領時期の太平天国の宗教に対するヨーロッパ人の認識」、国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』46号、2020年。
- 4) 太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編』鳳凰出版社、2018年。この史料集はかつて出版が途中で中断した太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』（全6冊、中華書局、1961年）の不足を補うもので、その目録によって存在が知られながら、見ることの出来なかった史料を多く含んでいる。南京および江蘇に関する部分は第14冊から17冊までで、本稿では必要に応じてこの史料集に基づいて註記することにした。
- 5) 文芸奏、咸豊三年二月二十五日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』（以下『鎮圧』と表記）5、中国社会科学文献出版社、1992年、365頁。
- 6) 楊文定奏、咸豊三年二月二十九日『鎮圧』5、419頁。
- 7) 同上。
- 8) 諭内閣、咸豊三年三月初九日『鎮圧』5、515頁。
- 9) 諭内閣、咸豊三年三月十九日『鎮圧』6、65頁。
- 10) 楊殿邦奏、咸豊三年二月二十七日『鎮圧』5、375頁。
- 11) 楊以増奏、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、47頁および附件の張廷瑞供（同書52頁）、陸武曾供（同書54頁）。
- 12) 前掲、楊殿邦奏、咸豊三年二月二十七日『鎮圧』5、375頁。
- 13) 楊以増奏、咸豊三年三月初二日『鎮圧』5、440頁。
- 14) 諭内閣、咸豊三年三月初一日『鎮圧』5、423頁。
- 15) 琦善等奏、咸豊三年二月二十八日『鎮圧』5、398頁。また陳金綬と勝保によると、彼らが率いていた兵力は4,000人程で、琦善は大名兵、山東兵1,000人を加えて儀徴へ向かわせた（陳金綬等奏、咸豊三年二月二十二日『鎮圧』5、314頁、琦善奏、咸豊三年三月初三日、同書453頁）。
- 16) 琦善等奏、咸豊三年三月十三日『鎮圧』5、584頁。
- 17) 琦善等奏、咸豊三年三月十五日『鎮圧』6、5頁。
- 18) 琦善等奏、咸豊三年三月二十五日『鎮圧』6、165頁。
- 19) 陳慶年『鎮江剿平粵匪記』『太平天国史料叢編』14、6,433頁（『太平天国史料叢編簡輯』1、171頁）。
- 20) 向荣等奏、咸豊三年四月初三日『鎮圧』6、276頁。
- 21) 向荣等奏、咸豊三年四月十三日『鎮圧』6、385頁。文藝奏、同年四月十一日、同書354頁。文藝の上奏を受けた咸豊帝は、この戦いが「一大敗仗」であることは明らかであり、もし故意の「掩飾」があれば彼を即刻処刑せよと怒りをぶつけている。
- 22) 前掲、向荣等奏、咸豊三年四月十三日『鎮圧』6、385頁。
- 23) 向荣等奏、咸豊三年四月二十三日『鎮圧』6、533頁。
- 24) 楊文定奏、咸豊三年四月二十五日『鎮圧』6、549頁。同奏、咸豊三年五月初三日『鎮圧』7、22頁。また向荣奏、咸豊三年四月十三日によれば、呉健彰は楊文定の命を受け、上海で各国領事に船の借用を求めたが、よい返事は得られなかった。とくにアメリカ公使からは「今將與日本国打

仗、不能借用剿賊」と回答された（『鎮庄』6、389頁）。恐らくはペリー艦隊の日本派遣を指すと思われる。

- 25) 前掲、向榮等奏、咸豐三年四月二十三日『鎮庄』6、533頁。
- 26) 向榮等奏、咸豐三年五月十六日『鎮庄』7、182頁。
- 27) 光緒『丹徒県志』巻60、紀聞。
- 28) Charles Taylor MD, *Five Years in China* (Nashville, 1860), Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, Canberra: Australian National University Press, 1982, p. 63. 同じことは清朝側の記録にも記載があり、前掲、陳慶年『鎮江剿平粵匪記』は「賊拆南門外虎踞橋、開西門、通四鄉餼脯。復穿府治後垣、緣龍埂築堞至北固山頂。又自山西沿江築城、西至江口、包瓦子山、循運河而南、傳於西門外、長六里有奇、築砲壘六守之。復連檣数千、集南北岸、賊糧得不匱」と述べている（『太平天国史料叢編』14、6,433頁）。
- 29) Op. cit., Taylor, in *Western Report on the Taiping*, p. 66.
- 30) 向榮奏、咸豐三年五月二十二日、附協守鎮江指揮洪三度致貞得王稟文『鎮庄』7、297頁。ここで貞得王が誰をさすのかは不明だが、羅大綱が元天地会の首領であったことを考えると、当時ヨーロッパ人の間でその存在が注目を集めていた「天徳王」の誤記だった可能性がある。だがこれら天地会系の王は南京到達時には肅清されていたとする説があり、少なくとも太平天国側はその存在を否定していた。
- 31) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』『太平天国』4、655頁。
- 32) Op. cit., Taylor, in *Western Report on the Taiping*, pp. 64-65.
- 33) 例えば張德堅『賊情彙纂』巻4、偽軍制上に収められた「偽兵冊」には前十三軍前營前前一東兩司馬配下の將兵として、金田団營時に入隊した広西人の正司馬を筆頭に副司馬や伍長に湖北人、南京人、牌面と呼ばれた一般兵士に湖南、湖北、安徽、南京、揚州各地の出身者が記録されていた（『太平天国』3、124頁）。
- 34) 張德堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下によると、羅大綱は1853年5月に殿下五檢点に昇進した。後述のイギリス領事館宛の書信で彼が檢点を名乗っているのはその結果であろう。なお羅大綱は同年6月には丞相に昇進している（『太平天国』3、61頁）。
- 35) Op. cit., Taylor, in *Western Report on the Taiping*, pp. 67-68.
- 36) Ibid, pp. 67-69.
- 37) 陳善鈞『癸丑中州罹兵紀略』『太平天国』5、174頁。また前掲菊池秀明『北伐と西征——太平天国前期史研究』汲古書院、2017年、33頁。
- 38) Op. cit., Taylor, in *Western Report on the Taiping*, p. 70.
- 39) Ibid, p. 70. また太平天国が当初南京近郊の農民から食糧を購入していた点については、菊池秀明「太平天国の南京統治と江南大宮」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』47号、2021年、1頁。
- 40) 殿左五檢点羅大綱致上海英国領事館書『太平天国文書彙編』295頁。
- 41) 羅大綱呉如孝致大英帝国文武官吏函、太平天国癸好三年三月二十三日『続編太平天国』9、34頁。そこではJames J. G. Bremer、Charles Elliotらの名前が挙がっている。
- 42) 鄧元忠『美国人與太平天国』華欣文化事業中心、1983年、27頁。
- 43) 向榮等奏、咸豐三年六月十五日・六月二十三日『鎮庄』8、24頁・183頁。
- 44) 同上、向榮等奏、咸豐三年六月二十三日『鎮庄』8、183頁。論内閣、咸豐三年六月三十日、同上書274頁。また向榮によれば、この日焦山の清軍も太平軍の襲撃を受けた。

- 45) 劉麗川致洪秀全信函、太平天国癸好三年八月『鎮庄』10、460頁。この手紙はイギリス商人が羅大綱へ宛てた書信と共に清軍に押収され、両江総督怡良の上奏（咸豊三年十月初九日）の附件として提出された。原件は失われたが、抄本が中国第一歴史檔案館に所蔵されている（軍機処奏摺録副、農民運動類、太平天国項、8451-43号）。
- 46) 英商勒吶吐致羅大綱信函、軍機処奏摺録副、農民運動類、太平天国項、8506-69号（『鎮庄』10、459頁）。史料中、商人の中国名は「勒吶吐」で、茅家琦『郭著『太平天国史事日誌』校補』台湾商務院書館、2001年、59頁はこれをReinoldと訳している。
- 47) 怡良奏、咸豊三年十月初九日『鎮庄』10、458頁。
- 48) 滌浮道人『金陵雜記』『太平天国』4、625頁。
- 49) 羅孝全『小刀会首領劉麗川訪問記』『太平天国』6、967頁。
- 50) 前掲、滌浮道人『金陵雜記』『太平天国』4、625頁。
- 51) 上海社会科学院歴史研究所編『上海小刀会起義史料匯編』上海人民出版社、1958年、15頁。また郭豫明『上海小刀会起義史』中国大百科全書出版社上海分社、1993年、112頁によると、その後も小刀会の出した布告は「大明」と「太平天国」を併用しており、必ずしも統一されていた訳ではなかった。
- 52) M. T. Yates, *The Tai-ping Rebellion* (晏瑪太著、簡又文訳『太平軍紀事（講詞）』『太平天国』6、934頁)。Yatesはアメリカ・バプテスト教会の宣教師で、ロバーツが馮雲山の息子を上海に連れてきたことを知っていたが、彼がどのような経緯で劉麗川らに迎えられたのかはわからないと述べている。
- 53) 前掲、滌浮道人『金陵雜記』『太平天国』4、626頁。
- 54) 向荣等奏、咸豊三年十月二十六日『鎮庄』11、10頁。向荣は東壩の戦略的な重要性について早くから認識を持っており、江南大営から兵を派遣して警戒に当たらせたり、地元の紳士に団練を組織させ、山間部に入植した安徽からの移民である棚民に対する管理を行っていた（同奏、咸豊三年五月十六日『鎮庄』7、186頁）。
- 55) 向荣等奏、咸豊三年十一月十二日『鎮庄』11、180頁。
- 56) 向荣等奏、咸豊四年七月三十日・閏七月初五日『鎮庄』15、141頁・175頁。後者の上奏はこのとき交戦した「桀賊」について、「此爲首逆羅大綱即羅阿旺者……、該逆料難竄入蘇常、次日我兵分抄襲擊、遂即大敗敗走高淳、搜捕東壩上下、現在已無餘匪」と述べており、この太平軍が羅大綱の指揮する部隊であったことを伝えている。
- 57) 張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名（『太平天国』3、61頁）。これによると羅大綱は1854年4月に南京に呼び戻され、豫王胡以晄と共に廬州作戦に参加した後安慶を拠点とした。同年11月に田家鎮の戦いで太平軍が敗北すると、楊秀清は羅大綱に湖口県を守らせたという。
- 58) 同上、張德堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名（『太平天国』3、64頁）。呉如孝は1853年末に南京に呼び戻され、東壩攻撃に参加したが、ついで鎮江へ戻った。1854年5月にアメリカ全権委員マクレーンが南京を訪問した時、鎮江で呉如孝らと接触している。その後8月に清軍が鎮江を攻めたとき、呉如孝は敗北して行方不明になったとある。
- 59) 杜文瀾『江南北大営紀事本末』卷下、江北揚州大営紀事本末（『太平天国史料匯編』14、6,257頁）。
- 60) 倪在田『揚州禦寇録』卷上（『太平天国』5、104頁）。また清朝側が捕らえた葉桂の供述書によると、北王韋昌輝が2,000人の兵と300隻の船を率いて鎮江と揚州に至ったと述べている（琦善等奏附件、咸豊三年三月十三日『鎮庄』5、589頁）。ただしいずれの場合も短期の滞在で南京へ

戻ったようである。また揚州城外の陣地構築について、琦善は「近日賊將揚州城外關廂之民房概行燒燬……。訊之自賊營逃出被擄難民、僉稱係賊恐礙眼欲圖便於埋伏、現於城內周圍挖掘深溝、下排竹籤、刀劍等具、上覆以土、徧設奸謀、計在死守」と報じている（琦善等奏、咸豐三年三月二十八日『鎮庄』6、218頁）。

- 61) 琦善等奏、咸豐三年四月初三日『鎮庄』6、270頁。
- 62) 琦善等奏、咸豐三年四月十二日・四月十三日『鎮庄』6、369・381頁は北伐軍が浦口に上陸し、滁州を占領したと報じている。
- 63) 同上、琦善等奏、咸豐三年四月十二日『鎮庄』6、363頁。
- 64) 琦善等奏、咸豐三年四月十八日『鎮庄』6、463頁。
- 65) 琦善等奏、咸豐三年四月二十二日『鎮庄』6、520頁
- 66) 琦善等奏、咸豐三年五月初二日『鎮庄』7、15頁。
- 67) 前掲、倪在田『揚州禦寇錄』卷上（『太平天国』5、105頁）。この黄徳生なる人物について詳細は不明。
- 68) 同上。
- 69) 向榮等奏、咸豐三年十月十三日『鎮庄』10、508頁。
- 70) 琦善等奏、咸豐三年四月二十九日『鎮庄』6、580頁。また勝保は琦善を批判した上奏の中で、「每當進攻喫緊之際、琦善已伝撤退。奴才雖晝夜督陣、而爲所牽制、孤力難成、其意似不欲奴才在揚目擊克復……。總之、琦善之爲人、才具似裕、不免矜伐、少能容物。每遇摺奏、百端改竄、極力鋪張。但求自立脚步、不計実功、而不知暗中貽誤已甚矣」と述べたという。この上奏文は崔之清主編『太平天国戦争全史』2、戦略發展、南京大学出版社、2002年、1,082頁に引用され、「朱摺・革・太・号 79-9」と注記がある。中国第一歴史檔案館所蔵の宮中檔案であったことがわかるが、上奏文の送られた期日がなく、他の史料から原件の所在が確認できない。今後の課題としたい。
- 71) 勝保奏、咸豐三年五月十二日『鎮庄』7、119頁。
- 72) この頃楊殿邦は城北五台山一帯の太平軍陣地を攻撃した（同奏、咸豐三年四月初三日・四月初九日『鎮庄』6、278・333頁。
- 73) 慧成奏、咸豐三年四月二十八日『鎮庄』6、573頁。
- 74) 琦善等奏、咸豐三年五月初九日『鎮庄』7、72頁。
- 75) 琦善等奏、咸豐三年五月十五日『鎮庄』7、162頁。
- 76) 琦善等奏、咸豐三年四月十四日『鎮庄』6、428頁。
- 77) 琦善等奏、咸豐三年五月二十六日『鎮庄』7、344頁。
- 78) 諭内閣、咸豐三年五月十七日『鎮庄』7、203頁。
- 79) 雷以誠奏、咸豐二年十一月二十九日、軍機処檔、087821号、台北・国立故宮博物館蔵。雷以誠については、光緒『咸寧県志』巻6、人物志、選挙伝に伝がある。また彼が代奏した王家璧については皮明麻等編『出自敵対營壘の太平天国資料—曾国藩幕僚鄂城王家璧文稿輯録』湖北人民出版社、1986年を参照のこと。
- 80) 光緒『咸寧県志』巻6、人物志、選挙伝。だがこの時雷以誠が山東兵の削減を行った結果、北伐援軍の臨清攻撃を受けた山東巡撫の張亮基は兵力および兵餉の不足に悩むことになった（菊池秀明『北伐と西征』144頁）。
- 81) 簡又文『太平天国全史』中冊、第15章、中央区江北軍事、香港猛進書屋、1962年、1,125頁。なお簡又文氏は錢江がいかなる人物で、太平天国に獻策を行ったか、釐金の創設を雷以誠に建議

- したかについて詳細な考察を行っている。清朝は雷以誠の上奏を受け、6月に錢江を「妄陳圖讖、揺惑人心」の罪で斬首梟示とした（論内閣、咸豊三年五月十六日『鎮庄』7、176頁）。
- 82) 雷以誠奏、咸豊三年五月二十六日、宮中檔 4060004152 号、国立故宮博物院蔵。なおこの上奏は『清政府鎮庄太平天国檔案史料』には収録されておらず、中国第一歴史檔案館の軍機處奏摺録副、農民運動類にも見当たらない。財政類などに入っていると推測されるが、大陸と台湾の檔案史料をつきあわせて検討する必要性が改めて認識させられた。
- 83) 雷以誠奏、咸豊三年六月二十九日『鎮庄』8、258 頁（宮中檔 4060004398 号附件 1、国立故宮博物院蔵）。
- 84) 雷以誠奏、咸豊三年七月二十七日『鎮庄』9、34 頁（宮中檔 4060004543 号、国立故宮博物院蔵）。
- 85) 同上。なお該当箇所の原文は「至此次權宜開捐、捐錢者多、捐銀者少。營中支用、本有銀款。其有以銀上兌者、即以銀開支、務使一兩得一兩之用、以婦核矣。至原議米石並交、時因暑候蒸濕、未便兌取。下河為產米之區、秋收後納米甚便、擬以錢米搭交米石、隨時按照市價作錢、仍以錢數折銀」。
- 86) 同上。
- 87) 雷以誠奏、咸豊四年三月十八日『鎮庄』13、305 頁。
- 88) 同上。林則徐はアヘン戦争前の 1839 年 3 月に兩江總督に任命されたが、実際に赴任しないまま欽差大臣、兩広總督になった。従ってここで「總督」とは湖広總督（在任期間 1837 年～39 年）あるいは江蘇巡撫（同 1832 年～1837 年）時代を指すと見られる。簡又文氏は釐金制度について「湘人行之於會館、或即在揚州施行」（『太平天国全史』中、1,215 頁）と述べており、先述の王家璧が湘軍の兵餉捻出のために釐金制度の実行に努めたことを考えると、文中にある「一文願之法」とは元々湖北で実施されたと考えるのが妥当であろう。
- 89) 雷以誠奏、咸豊三年八月十五日、宮中檔 4060004708 号、国立故宮博物院蔵。
- 90) 雷以誠奏、咸豊三年十一月初八日、宮中檔 4060005381 号、国立故宮博物院蔵。
- 91) 雷以誠奏、咸豊三年六月初一日『鎮庄』7、426 頁。この戦いについて、琦善は郷勇が漕運總督福済が派遣したものと述べたうえで、「調遣無策」だった陳金綬の処罰を求めた（琦善奏、咸豊三年五月二十九日『鎮庄』7、397 頁）。
- 92) 琦善等奏、咸豊三年六月初六日『鎮庄』7、514 頁。
- 93) 琦善奏、咸豊三年六月初六日『鎮庄』7、512 頁。
- 94) 福済奏、咸豊三年六月十二日『鎮庄』7、587 頁。
- 95) 琦善等奏、咸豊三年六月十九日『鎮庄』8、101 頁。
- 96) 杜文瀾『江南北大營紀事本末』卷下、『太平天国史料匯編』14、6,256 頁。郭廷以『太平天国史事日誌』262 頁は「樓船」が知州許道身、運判杜文瀾の手になるものであったと述べている。また史料はこの時救援に駆けつけた太平軍は、江西南昌の攻撃に失敗して南京へ呼び戻された丞相賴漢英の部隊であったと述べているが、西征軍が南昌を撤退したのは 1853 年 9 月のことであり、事実と符合しない。琦善は六月二十六日の上奏の中で、「近日東風甚盛、而艇船總未進攻、賊巢近在瓜洲與鎮江聯成一氣、難保不糾合大股以圖復逞」と述べたうえで、捕虜の供述として「瓜洲之賊欲從鎮江添集賊党、共派三軍、每軍有二千五百名、來揚接應」と述べている（『鎮庄』8、223 頁）。7 月中旬の戦いで鄧紹良の清軍に大打撃を与えた鎮江の太平軍が、揚州の救援に向かったとみるべきだろう。
- 97) 前掲、琦善等奏、咸豊三年六月十九日『鎮庄』8、99 頁・100 頁。

- 98) 前掲、雷以誠奏、咸豊三年六月二十九日『鎮庄』8、256頁。
- 99) 福濟奏、咸豊三年六月二十二日『鎮庄』8、155頁。
- 100) 福濟奏、咸豊三年六月三十日『鎮庄』8、292頁。雷以誠奏、咸豊三年七月十二日、同書470頁。なお清朝はこの要請を受け、慧成の軍を揚州へ戻るように命じた(軍機大臣、咸豊三年七月初六日、同書374頁)。
- 101) 琦善奏、咸豊三年七月初十日『鎮庄』8、452頁・455頁。元々琦善の軍には黒竜江、吉林、西安の騎兵隊2,900人がいたが、すでに北伐軍の追撃や浦口、儀徴県の防衛に送られていた。また直隸、山東兵も多かったが、彼らは江南の風土に慣れず、下痢や病気のために戦力は低下していたという(倪在田『揚州禦寇録』巻上(『太平天国』5、109頁)。
- 102) 琦善奏、咸豊三年七月二十一日『鎮庄』8、600頁。
- 103) 雷以誠奏、咸豊三年七月二十三日『鎮庄』8、614頁。
- 104) 慧成奏、咸豊三年七月二十六日『鎮庄』9、3頁。
- 105) 袁甲三奏、咸豊三年十二月二十七日『鎮庄』12、96頁。李興清は琦善が漢人の参将である馮景尼を処刑したことに反発して離反し、泗州で独立勢力として割拠したが、袁甲三の弾圧を受けて殺された。彼の部隊の生き残りは北伐援軍の先導役を務めたという(菊池秀明『北伐と西征』140頁)
- 106) 前掲、倪在田『揚州禦寇録』巻上(『太平天国』5、108頁)。
- 107) 同上、倪在田『揚州禦寇録』巻上(『太平天国』5、110頁)。
- 108) 前掲、慧成奏、咸豊三年七月二十六日『鎮庄』9、3頁。
- 109) 范承典奏、咸豊三年八月二十九日『鎮庄』9、481頁。ここで監軍として派遣が期待されている「親信王大臣」とは僧格林沁をさすと思われる。
- 110) 前掲、倪在田『揚州禦寇録』巻上(『太平天国』5、108頁)。このうち毛三元については、8月10日の戦いで活躍したことが報じられており(琦善奏、咸豊三年七月初十日『鎮庄』8、452頁)、10月には「出力人員」として花翎が与えられている(同奏、咸豊三年九月初四日、宮中檔4060004882号、国立故宮博物館蔵および各処出力官兵敬繕清單、軍機処奏摺録副、農民運動類8491-56号、中国第一歴史檔案館蔵)。ただしこの時7月20日の虹橋の戦いで敗北した守備金保光が革職のうえ新疆へ送られる処分を受けており(琦善奏、咸豊三年九月初四日『鎮庄』9、575頁)、記述に混乱があるのかも知れない。
- 111) 例えば太平軍の湖南進出を防げなかった両広総督の徐広縉が処罰され、財産を没収されたのに対して、欽差大臣だった賽尚阿が厳しい処分を受けなかった例が挙げられる。当時のヨーロッパ人もこうした漢人官僚に対する苛酷な処分は、かえって清朝に対する人々の支持を失わせることになると観察していた(菊池秀明「暴力革命は肯定されるか——南京占領時期の太平天国の宗教に対するヨーロッパ人の認識」)。
- 112) 諭内閣、咸豊三年六月初五日『鎮庄』7、491頁。
- 113) 軍機大臣、咸豊三年七月二十八日『鎮庄』9、44頁。
- 114) 軍機大臣、咸豊三年八月十三日『鎮庄』9、221頁。
- 115) 軍機大臣、咸豊三年八月二十七日『鎮庄』9、457頁。
- 116) 前掲、倪在田『揚州禦寇録』巻上(『太平天国』5、106頁)。
- 117) 同上、倪在田『揚州禦寇録』巻上(『太平天国』5、106頁)。これは7月20日の戦いを指すと考えられる。また倪在田によると、太平軍は城内の住民を「外小」と呼んで冷遇した。城内の食糧が不足すると、清軍との内通が疑われる者を南門近くに集めて殺したという(同書107頁)。

- 118) 琦善等奏、咸豊三年七月二十一日『鎮圧』8、594頁。
- 119) 琦善等奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、195頁。
- 120) 例えば5月に山東巡撫李儉は揚州城内の状況について「現據探報、有揚城逃出者備言、賊匪以天日為父、以耶蘇為兄、不論上下父子、率以兄弟相稱謂、即母女亦姊妹名之。初入城時、燒燬廟宇、肆意搶掠、即升米寸布亦所必取。衣不問男女長短、祇須蔽身、味不辨甘苦酸辛、雜煮攫食。其逆首出入坐轎、頭紮黃紬、披至腦後、打五六結、以多為貴、身穿各衣、外罩各色長褂、赤足着鞋。前導小孩數十對、由賊夥扶掖而行、以為威儀……。沿街有偽示、係東西二偽王名色。現雖擁衆万余、裹脅十之八九、名曰報効軍、實則一敗即散。每與鄉民相關、輒被擒殺、其無勇力可能知。所恃者不假硝磺、吹草即能火起、然過午不驗、官軍於未申時破之尤速等情前來」(李儉奏、咸豊三年四月初七日『鎮圧』6、318頁)と述べている。ここでも総兵力が1万人以上、その多くが「裹脅」であると述べるに止まり、食糧の備蓄などについては報じていない。また8月に琦善は殺害した太平軍將兵2,000人が皆「壯年長髮之逆匪」であり、湖南郴州、桂陽州、衡州の地名が入った旗を掲げていたと報じた(琦善奏、咸豊三年七月初十日『鎮圧』8、452頁)。なお僧格林沁らの情報収集については前掲菊池秀明『北伐と西征』第2章、第3章、第4章を参照のこと。
- 121) 慧成奏、咸豊三年八月二十一日『鎮圧』9、373頁。この時慧成は閩浙総督に任命されていた。
- 122) 琦善等奏、咸豊三年八月二十三日『鎮圧』9、397頁。ここで琦善は「江寧、鎮江之賊、欲乘中秋大汛之期、乘船駛入内河、会合瓜洲之賊前來援応」「詎意連日埋伏偵探、竟不見賊船到來」と述べている。
- 123) 琦善等奏、咸豊三年九月初四日『鎮圧』9、572頁。
- 124) 琦善等奏、咸豊三年九月十六日『鎮圧』10、168頁。
- 125) 雷以誠奏、咸豊三年九月二十五日『鎮圧』10、289頁。
- 126) 琦善等奏、咸豊三年九月二十九日『鎮圧』10、348頁。
- 127) 琦善奏、咸豊三年十月初二日『鎮圧』10、369頁。
- 128) 軍機大臣、咸豊三年十月初一日『鎮圧』10、355頁。
- 129) 同上、356頁。
- 130) 琦善等奏、咸豊三年十月十五日『鎮圧』10、539頁。
- 131) 琦善等奏、咸豊三年十月三十日『鎮圧』11、54頁。
- 132) 前掲、倪在田『揚州禦寇録』卷上(『太平天国』5、111頁)。ここで倪在田は救援軍に石祥貞、黄生才が加わっていたとしているが、石祥貞は西征軍を率いて九江、田家鎮へ向かっており、この記述は誤り。また黄生才は北伐援軍の指揮官だったことで知られるが、当時彼は揚州城内の守備に当たっていた可能性がある。黄生才については張守常「『黄生才供詞』和『粵匪南北滋擾紀略』」(『太平軍北伐叢稿』齊魯書社、1999年)を参照のこと。
- 133) 琦善等奏、咸豊三年十一月初四日『鎮圧』11、91頁。
- 134) 前掲、倪在田『揚州禦寇録』卷上(『太平天国』5、111頁)。ただし琦善の上奏では毛三元よりも総兵瞿騰龍らの功績が強調されている。
- 135) 前掲、琦善等奏、咸豊三年十一月初四日『鎮圧』11、91頁。
- 136) 琦善等奏、咸豊三年十一月初八日『鎮圧』11、125頁。
- 137) 同上。
- 138) 琦善等奏、咸豊三年十一月二十六日『鎮圧』11、343頁・345頁。
- 139) 雷以誠奏、咸豊三年十一月二十六日、同書347頁。

- 140) 慧成奏、咸豊三年十一月二十五日『鎮圧』11、333頁・335頁。
- 141) 琦善等奏、咸豊三年十一月二十八日『鎮圧』11、375頁。
- 142) 慧成奏、咸豊三年十一月二十六日『鎮圧』11、346頁。楊以增奏、咸豊三年十二月初一日、同書394頁。
- 143) 前掲、琦善等奏、咸豊三年十一月二十八日『鎮圧』11、375頁。また前掲倪在田『揚州禦寇録』卷上は「漢英等入揚州、使立昌藉居民脇以遁」「立昌困久思横逸、又畏官軍擊、倉卒驟出、首尾不相顧」と述べている（『太平天国』5、111頁）。
- 144) 軍機大臣、咸豊三年十二月初二日『鎮圧』11、397頁。
- 145) 前掲、雷以誠奏、咸豊三年十一月二十六日『鎮圧』11、349頁。
- 146) 慧成奏、咸豊三年十二月初九日『鎮圧』11、484頁。
- 147) 琦善奏、咸豊三年十二月十三日『鎮圧』11、529頁。
- 148) 琦善遺摺、咸豊四年閏七月初三日『鎮圧』15、170頁。
- 149) 『清史稿』卷370、列伝157（中華書局版、1980年、11,499頁）。また賽尚阿、訥爾經額の評価については前掲菊池秀明『北伐と西征』77頁を参照のこと。

太平天国時期の揚州・鎮江

(1853年～54年)

